

アクティブラーニング

動き出す学校と先生たちの実践レポート

# AL型授業への挑戦

さまざまなメディアやシンポジウム等で「アクティブ・ラーニング」をテーマにしたイベントが開催されています。同時に、アクティブラーニング型授業(以下「AL型授業」)の実践に向けて校内研修会や研究会が全国各地で開催されています。この連載では学校組織としてAL型授業に取り組んでいる学校をご紹介します。今回は、学校改革の柱として全教科でAL型授業を導入している熊本県立熊本北高校を取材しました。

企画協力/小林昭文(産業能率大学 教授) 取材・文/長島佳子 撮影/姉川友香



第4回

## 熊本北高校(熊本・県立)

School Data

1983年創立/全日制普通科/生徒数1082人(男子616人、女子466人) /進路状況(2014年度実績) 大学270人、短大4人、専修・その他16人、就職5人



牛田卓也校長(右)

1987年熊本北高校で初任。1998年から熊本県知事部局、文科省教育課程課、教育委員会での勤務を経て、2008年より県立高校の教頭職、再び教育委員会勤務を経て2013年より現職。

濱本昌宏先生(左)

主幹教諭。1995年に大津養護学校で初任。2014年より現職。保健体育教諭としてAL型授業に取り組み、その実践内容は小林昭文先生の著書『アクティブラーニング実践』に掲載されている。

### 学校改革の柱として アクティブラーニングで授業改革

教員がアクティブになり  
授業研鑽の意識が向上

牛田校長が2013年に校長として同校に赴任し各教室をまわった際、生徒たちが大人しくまじめすぎて、授業への参加が受身であることが気になった。同時に全職員と面談を行った際に、教員たちも校長と同じ印象を持っており、それを課題と感じていることがわかった。

折しも、県教委が初の「学校改革プロジェクト」支援事業をスタートさせた時期だったため、それに乗る形で授業改革の柱としてAL型授業を全校で取り組み始めた。

まだスタートして2年弱だが、生徒にも教員にも如実な変化が出ている

という。

「生徒が楽しそうに授業を受ける風景が増えてきました。また同時に、先生たちが職員室で授業の話題を発売にするようになったのです。当校では年2回、お互いの授業を参観し合う『スキルアップ週間』を行っており、以前は形骸化してあまり参観する先生がいまありませんでしたが、今では多いときには1つの授業に10名程の教員が見学するなど、教員がアクティブになっています」(牛田校長)

「昨年度から参観の際に『授業公開シート』※別冊P.107という、見た授業の感想などを記入するシートを導入しました。参観すべきポイントがわかって、見学する先生方の真剣度が変わってきました。保護者からも好評で、

授業参観の際には、「自分もこんな授業を受けたかった」とお声をいただいています」(濱本先生)

それでも、まだスタートラインに立ったばかりだと牛田先生は語る。

「今後は生徒の実情に合わせてAL型授業をシラバスに盛り込んだり、ICTを整備したり、ノウハウや教材を教員間で共有化させていきたいと思えます」(牛田校長)

### 熊本北高校のアクティブラーニング型授業への取り組みの歩み

熊本北高校は、牛田校長が着任した2013年に、県教委の「学校改革プロジェクト」支援事業の指定校に採択された。改革の柱として「授業改革」と「校務改革」を掲げ、教員たちによるワークショップで浮き彫りになった課題を解決するために、AL型授業の導入を決定。同年10月から先進校への視察など情報収集を行い、2014年4月から全教科で実施を開始した。今年の6月に産業能率大学の鈴木建生先生を招いての全教員研修会を行うなど、実践と研究を同時並行で進めている。



学校改革に向けての教員のワークショップ風景(上)。産業能率大学の鈴木建生先生によるAL型授業の教員研修会(右)。



日笠山万希子先生(中央)

高村哲哉先生(左)

後藤正範先生(右)

### SSH Active Challenge(2学年)

教科を超えて力を合わせて授業を行う3名の先生の教員としてのモットーは、日笠山先生は「生徒と共に学ぶ」、高村先生は「一歩、一歩。」、後藤先生は「教える授業から学び合いの授業へ」と、アクティブラーニングそのものだ。



## 英語が苦手な理系生徒が興味のある題材で英語を楽しんでいる!

「授業がおもしろい!」と生徒の笑顔があふれる授業

SSHアクティブチャレンジ(以下、Aチャレ)は、同校がSSHの指定を受けた4年前から行っている理数科クラス向けの学校設定科目だ。昨年までは理科や数学の先生が担当していたが、今年は主軸を英語として、題材に



サイエンスを扱う授業を行っている。授業の進行は英語科の日笠山先生が担当し、化学の高村先生と数学の後藤先生が専門的な内容についての生徒フォローに入る。

この日の授業は、英語でのプレゼンだ。東大の研究活動を視覚的に表した冊子を題材に、興味をもったテーマ別に10班に分かれ、「いつ、誰が、何のために、どんな研究をしたか」を前回までに英語で原稿を作成。3名の先生のほか、2名の留学生にも審査員に加わってもらい、生徒たちは各審査

### 教員27年 波佐間裕先生

### 英語コミュニケーションII (2学年)

1989年熊本県立人吉高校に着任。その後、熊本北高校、八代東高校に勤務後、2007年から県の教育センター、2009年から教育庁の高校教育課で指導主事を務める。2014年から現職。教員としてもモットーは「創意工夫と試行錯誤」。

## ALL活動ではない。 思考を深めながら協同し グループに貢献してほしい

得た知識を忘れたとしても協同した経験は残るはず

一昨年度、県の教育委員会では、指導主事を務めていた波佐間先生は、7年ぶりに教壇に復帰した。

「指導主事時代は英語教育の変革の時期だったので、新しい学習指導要領について説明する立場でした。いざ現場に戻ると、生徒の能動性を引き出したり、授業を活性化させるにはどうしたらいいのか、試行錯誤の日々です」

先生の授業は、基本はすべて英語で進行される。グループワークでは、英語圏の子ども用の英英辞典の中から、班のリーダーがいくつかの単語につい



て意味を読み、他のメンバーが何の単語についての説明か当てる活動や、一文ずつ書かれた6枚の短冊を並べ替えてひとつの文章としてつなげる作業を行っていた。単語を覚える際はフラッシュカード式のアプリケーションを使って、モニターに映しながら全員で声を出す。グループワーク以外でも、ワークシートに書かれた設問について、隣の席の生徒と答えをチェックし合うなどして、先生が解説する時間以外には、生徒たちが常に言葉を発していた。

それでも波佐間先生は「ALL活動やグループワーク」ではないと語る。「黙って英文を読んでいても、アクティブに読んでいけばALLだと思っので、生徒に学んでほしいのは、協同学習を通して、学びのコミュニティ(共同体)に貢献することです。これからの時代で求められるのは、そんな人材だと思っからです。大学での研究や社会人として仕事をする上で大切な





審査員となる先生は、評価ポイントごとに細かくチェック。英語、科学だけでなく、プレゼン力も鍛える。

ネイティブの留学生に対しどれだけ伝わるかの、英会話の実践の場にもなっている。高校生同士なので気軽に会話がはずむ。



プレゼンだけでなく、審査員の先生からも質問が出るため、生徒たち一人ひとりが真剣に取り組む。



員にプレゼンする。プレゼン内容が担当別なので、全員の生徒が話さなければならぬ。

審査員が各班にまわってくると、生徒たちは一生懸命に伝えようとする。自分で書いたプレゼン原稿の単語が読めないときは、留学生を呼び止めて読み方を教わったりしていた。

「理系の生徒は英語に対する苦手意識が高い生徒が多く、最初は下を向いていることもありましたが、テーマに興味があるので、最近では自分から話しかけてきてくれます。私自身が題材の冊子を初めて見たときに、電解液などの顕微鏡写真の神秘的な美しさに興味をひかれましたが、生徒も興味

津々でした」(日笠山先生)

授業中に生徒に声をかけてみると「英語は苦手だけどこの授業はおもしろい！」と笑顔で答えてきた。

「化学の授業は実験があり、もともとALです。実験と同じくらい生徒がイキイキできる授業をほかの教科でもやりたかったのです」(高村先生)

「数学の教科でもAL型授業はやっていますが、どうしても生徒の能動的な活動に制限が出ます。Aチャレは生徒の学び合いの時間をたくさん取れて、教科に対する知的好奇心を引き出せます」(後藤先生)

先生も生徒も笑顔でやりとりする様子が印象的な授業であった。

### 小林昭文先生からのアクティブラーニング型授業へのアドバイス



産業能率大学 経営学部教授  
小林昭文先生

1952年生まれ。空手のプロを経て、埼玉の県立高校教員として25年間勤務したのち、定年退職、2014年より現職。河合塾 教育研究開発機構 研究員も兼任。教員時代にカウンセリング、コーチング、アクションラーニング、メンタリングなどを学び、最終勤務校では物理のAL型授業を実現。現在もその研究と実践、啓発活動に取り組む。

### 学校が変わろうとする強い意志がある組織的な取り組みの進んだ学校

今回ご紹介した熊本北高校は、学校改革を授業の改善で行うことに決め、そのために何をするか現場の先生方がワークショップで話し合い、アクティブラーニングを導入することとなった学校です。学校改革に名乗りを上げた校長とともに、教員全体で組織的にAL型授業へ舵を切った理想的な例のひとつです。

一昨年、私が熊本県立教育センターで研修会を行った際には、同校から各教科から1名ずつ、計8名もの先生が大挙して参加していただき、強い意志を感じさせられました。

この連載をスタートした今年の春ごろには、まだAL型授業を組織的に取り組んでいる学校は少なく、言葉も浸透していなかったかもしれませんが、新しい学習指導要領が浸透してきてからは、全体で取り組もうという学校も増えてきたと思います。以前は個人での取り組みに居心地の悪さを感じていた先生も、他の先生方からの理解が得られやすくなったのではないのでしょうか。時代は着々と進んでいます。時代に見合った学びを生徒に体感させてあげてほしいと思います。

は競争ではなく協力ですから。グループでの活動が苦手だったり嫌いな生徒もいますが、そんな生徒にもその有用性に気づいてもらえるよう、これからも工夫していきたいですね。協同学習の中で、生徒同士がお互いの獨創性を引き出し合えるような授業になったり、生徒たちが自ら学び合うようになることが理想です」

生徒たちのグループワークでの積極性は上がっているという。

「今後は思考を深める発問について、もっと研究していきたいです」

